

平成二十一年（二〇〇九年）四月十日 歩行困難の意味

神から人へ、人から神へ。

人の人生、一生は、短く、早く、過ぎるもの。

なれば人は 一日を、心をこめて、思いを高め、一時の間をも 逃さずに、己の持てる 全てをかける、さなる思いで 生きるべし。
さにて本日、何を問うや。

（ある方が、最近、著しく歩行困難になりました。その方にはまだまだご使命がおりかと存じます。歩行困難になられた原因と、どうすれば歩行の力が回復するかをお教えください。）

さても、この世に 生まれし者には、必ず老いあり、病あり。この世における役目を終わらば、やがてはあの世に戻り来て、生ける間の清算と、御魂に残せる穢れを祓い、犯せし罪や あやまちを、神の前にて 詫びねばならぬ。

足には足の役割あり。人の体を支えつつ、体を動かし、移動して、心と体の動きを促す。

心の循環、気の循環、体の細胞一つ一つが、滞ることなく、穢れを流し、常に清らに保てるように、人は足をば 使うべし。
歩くことには意味のあり。体の健康、そののみならず。体を動かす基本にて、心も共に動くもの。

心は体の動きと共に、囚われ、拘り、執着 離れ、自由の境地に 解き放たれむ。

歩くことの困難は、心の奥の 惑いの表われ。

心の束縛、蹂躪が、足に表われ、歩行を妨ぐ。

迷いや悩み、心の疲れは、足の萎えへと 表われむ。

悲しみ、怒り、恐れ、焦りは、心垢となりて、淀みとならむ。

心の健康、充実は、心を動かし、気を遣うこと。

感謝と 謙虚と 希望と 忍耐。そを手に入れるが、生の意味。

歩けぬときにも、心を動かし、心の自由を 手に入れよ。

心をいかに動かすか。そこそは 人の自由ならむ。

心の自由を 使いこなさば、人には悩みも 惑いもなし。

体は心と共にあり。心が老いて 病むときに、体の老いも 始まらむ。

喜びに満ち、笑いを絶やさず、明るき未来を 描ける者は、体も軽く、伸びやかなり。

体の老いは 避けられぬもの。なれど 心の持ち方一つで、体は心に 従い 動かむ。

体の老いは 緩やかなれど、心の老いは 突然なり。

体の老いには敏けれど、心の老いには 疎かるもの。

先ずは 己の心の奥に、神の光を 取り入れるべし。

心に感謝の念あらば、神の光は 眩く 照らさむ。

体の老いへの囚われは、心の自由を奪うもの。

体は 借り物、仮のもの。

神から 現世の生のため、現世の修行に 励むため、片時 貸されし 器なり。

生あるうちは、大切に、使える間は、充分 使えよ。

働き、動かし、役立ててこそ、天意に応える 生ならむ。

人の体も 宇宙の一部。天の動きに背かずに、地球と一つの命と悟らば、体は 天に 動かされむ。

人の心は自由なれども、真の自由は、天意に沿いて、神の心と一体なる時。

さにて、本日、歩行困難なることの意味を、神の視点より、説き示したり。

人知には不幸なることも、神の目からは 不幸にあらず。そをば 心に留めて置かれよ。さにて。